



繪本太閤記

三編

七

伊13  
1823  
2/21



特 13  
1833  
31



繪本古図記三篇卷之七

目録

園崎の城合戦之話

日圖

惟任光秀の眼信長之話

日圖

惟任光秀の再興信長之話

光秀の郷土を令せらば旅籠と造営と之圖

光秀再び信長を恨むる圖

光秀の長子蘭丸を弑す之圖

真領記三篇卷之七

任光秀三眼信長云話

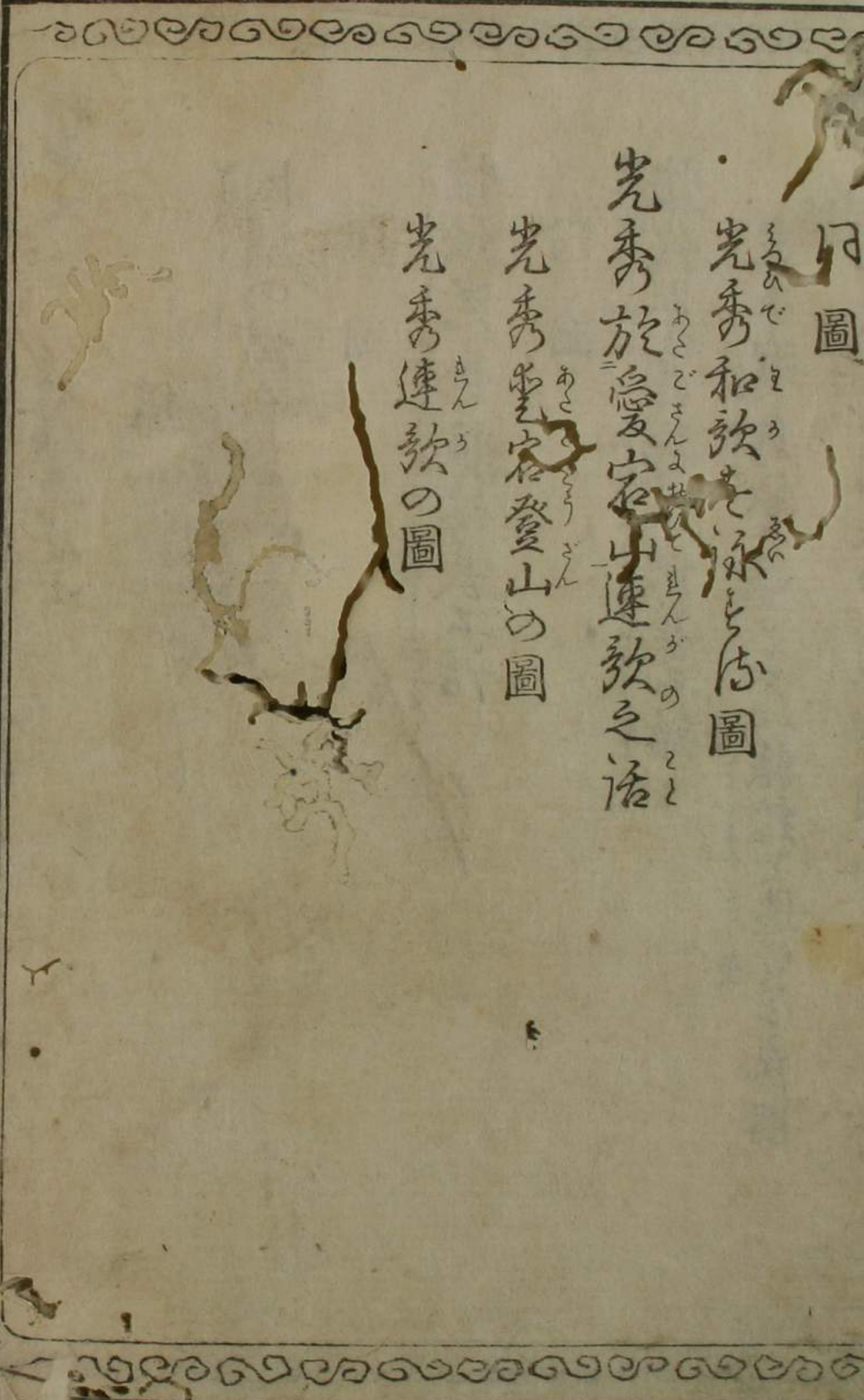
日圖

光秀和歌を詠むと云圖

光秀於愛宕山連歌之話

光秀坐岩登山の圖

光秀連歌の圖



繪本之圖記三篇卷之七

園崎城合戦



若傍の東が美成と云ふ地は信長が城となりけ城本丸は桂氏部少輔廣  
重東の丸は生石中務西の丸は山本元忠等と云ふに其勢都合ふ  
七百余人名利家より募るる者より若東の丸のまね生石中務秀吉  
は帰服し後田が勢と城中引んと約せしけ密に本丸の持桂氏部少  
輔廣重等智勝はねたるが悟りしうや心附さるや伺ひ試んとて夜中  
中務只一人本丸の勢を中合と云ふ軍のあき中務来りしう内と  
用ひしと云ふ附内は廣重が夜白りの役人來り合せ門をもちて役人を  
門を守らば役と出たりと云ふ忽緒に勅を急ぐ条奇技と罵る  
中務は之を聞き扱ひ我退後をよく知て形用心とる

真更巳二月三十一

園崎の城  
谷敷の園



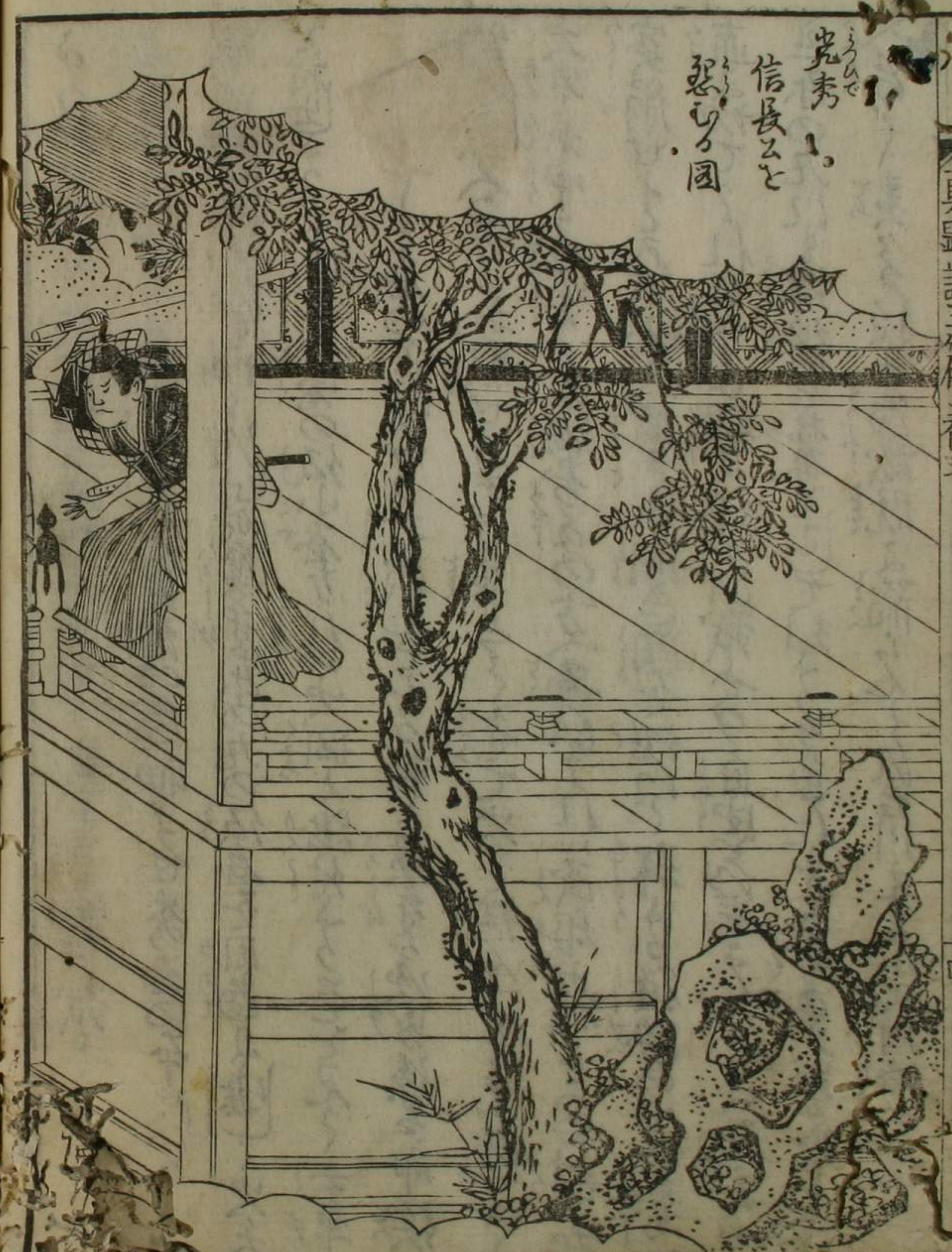
真田信玄 陣巻七

棟心と生じきりて我若只逆入りぬら番の彼人の疾より我若只逆入りぬら番の彼人の疾より  
 改を速板門外の中務の来り我若先門を開くべしとてわらひしく開きて  
 とも更人陰も刀を懸や正く家より我若只逆入りぬら番の彼人の疾より  
 疾中俄より幸九向人垣擁せ遂に本と極城戸を固て嚙きたる氏部  
 少捕廣きと見く肝を潰しこ心得ぬりうるあつたの方をこそ我若  
 にも懸い用心とまきよ本城へ向ひくる形勢何様ぞい逆心と企る者ぬ  
 らん用急せうらんも不足とと本丸の掃の内よ米の俵をいしと積  
 率のあつたに擁擁をかき用心堅固又結つけらう中務の戻り勢は彼を  
 来らせ米が及心氏部少捕懐りと我若只逆入りぬら番の彼人の疾より  
 云せたるは彼若勢三百余人を中務の加勢と見中務大に懸  
 明ごと我若只逆入りぬら番の彼人の疾より我若只逆入りぬら番の彼人の疾より

めるれば矢間を開き日く我若只逆入りぬら番の彼人の疾より  
 彼若勢教を去りて打群く賀茂の城押よせ米若右の本陣  
 勢結縛して引も切りけし耐度手束の丸の飯屋を目當と嚙く火矢  
 と討出らるる少捕廣の飯小居方れば火圍と燃付らうそとらんく士率  
 二人とらんくと屋のよらう打消んととる系と廣きが次男孫を即我  
 砲を二人とらんく打殺せらうそと恐とてきて火を燃んととるりのわり  
 火若を中よ遂り余烟あまの方へ擁ひくれ氏部少捕といや討て出  
 突崩せよと二百余人城戸を開き圍を破りて群うる猛勢の中へ暮  
 直り切てくれい若子烟をむせひ我若只逆入りぬら番の彼人の疾より  
 是束の丸にも堪得と極藤として引らるるそれともあつた大勢たるは  
 入向く妻若只逆入りぬら番の彼人の疾より我若只逆入りぬら番の彼人の疾より



秀  
 信長と  
 秀  
 秀



んは後浩せどんが久しうに元長經言を大おと二万余人等の  
横合より突崩さんとして按で進もる若果右の加勢せざるも  
も仰ぐばえま澄系馬を出しあま存と一戦は亮しして相山乃  
惣軍敵のあ換を初め切て出んとしつたる後田勢も後浩乃勢  
来るを乃くゆを立替向ひ戦えんは實は抑ひく敵味方もとハ  
や只今大合戦こそ始りなんと息を浩てんは乃く蛙が鼻秀吉の  
本陣より武者二騎一糸は馳来り小旗を味方を制し悉く軍士と  
引上げ陣をく引入れば中國勢も秀吉あつたがく戦ひを慥らバ  
殺て戦ふも叶ひ難く是も軍勢と引して元の陣を守らる  
惟任光秀恨信長云  
實は不思議のゆれ出来たり右大臣信長公の家臣惟任

光秀叛道を企て天正十年六月二日京都本陣より抄りて  
信長公と秘通し身は其由て後不を恐るは信長公智深勇  
論はして人敵の私なる人を初め明女秀吉の其身信義とまりり  
終るの金石のぶく巽く抄りてしよ依てや人の罪を悔し終る  
も又甚若下其職は遠よりあつたは是を忘し終りて下罪と  
悔し過を改め云も罪を免て一旦寛宥ありなり後より内は終る  
せむい露も四悪を忘し終りて是より多くの手を経て罪は終  
りて若教をさすは依之間信長林依後守安反悔が守荒本橋  
津守等を見くまらば一音は堂どうの付い衆若進し一悪を罰と  
る付い衆悪恐る況や其れ若類悪は抑ひてをや惟任光秀自己  
が罪を免たり是をいひ陳しや大信長公の宥し終りんは是れ

佐分將く宮に居りて終に御怒り解さく患必と身及らん  
ゆを計りて叛逆を企てしものちう人の看さる人若慢まどんあそ  
ら及び忠を以て人の己は忠なきを恨むとこそ古語にいへり  
伯耆叔齊の舊悪を思ひて怨を以て希之義と作は比の永き  
恨かんとぞなや福系倭後入道一徹母が羽翼と作し  
義少利三名和和永守の長持とす者ありけ  
國を破る山城守秀龍入道三が姪之去る永福七年道三が嫡孫  
破る右兵衛左補龍貞信長とのる滅亡其後と去りて  
抄して内務女守くありてさまよひと日向守光秀は國舊  
地の奴とわしに己が方又客居させ扶助するの兒ありけり  
光秀が忠と作く感と福系入道一徹母内務女が勇武  
を盡く知りてうたれに光秀は信じて重臣と以たり一徹母は

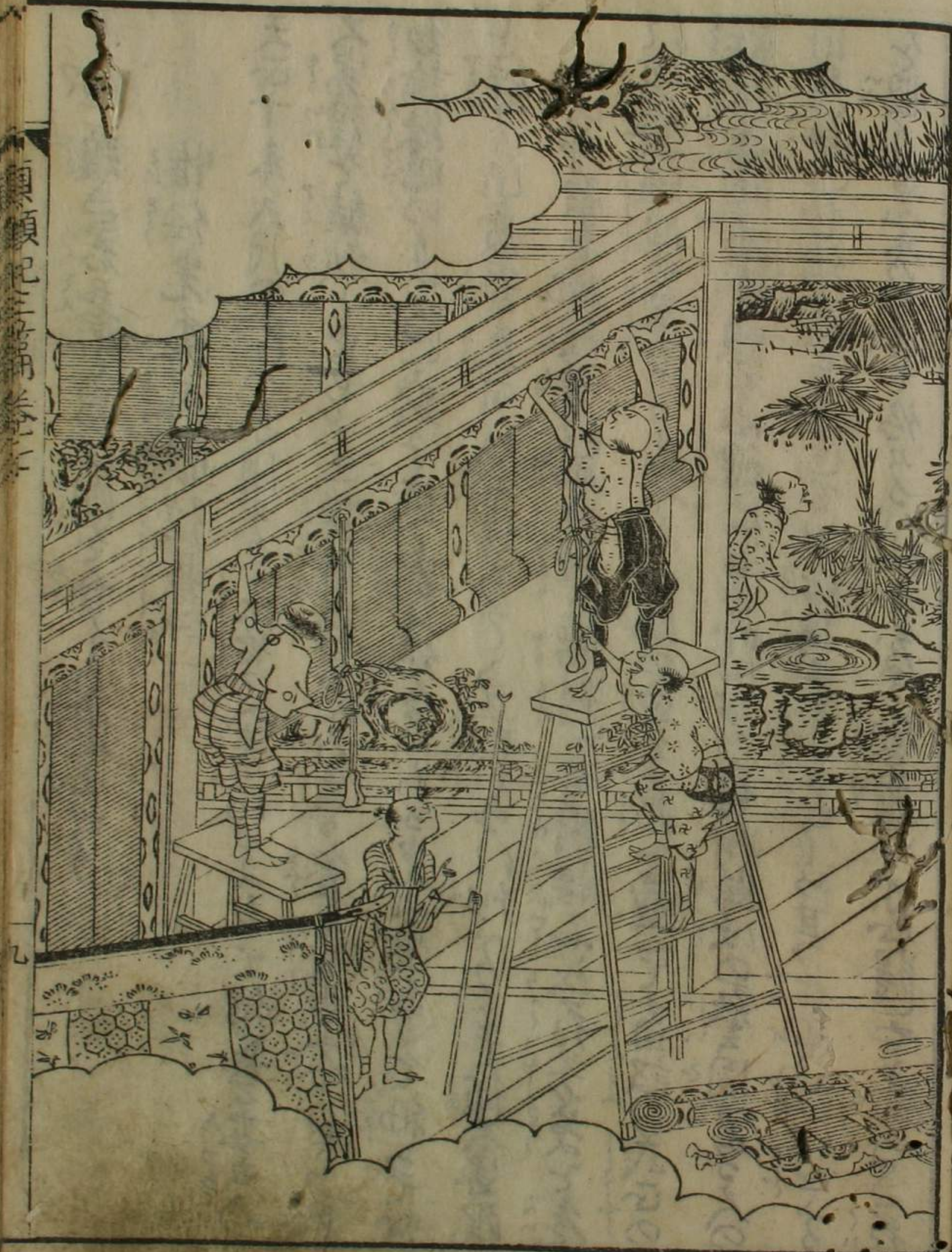
中二破る内務女名和和永守兩人の右に去き者曾て  
是にうけり朋輩の士偏執け兩人を後言一徹怒りて二人の勇士  
を退放し内務女は光秀と作しはく忠誠を以て功を立  
光秀が忠と報んとり名和和永守も内務女と作し光秀が臣下  
と作し光秀兩人と其忠を以て扶助するの一徹は信ぜり一徹母は  
を愛其怒り光秀に理者く兩人を去るとり時天正十三年に月  
上旬信長は甲斐の武田勝頼を討ち其忠と作しはく  
豫守一徹母と作しはく今度の合戦倭赤那の働きよ抄ひと忠之節  
もなり功名りてい何れやと月仍あの一徹母甚喜面て言や  
羽軍の臣破る内務女名和和永守兩人少の破り付た爲故惟任



日向守が許さ仕へ兵をひきよき此兩人の勇士を軍中の標りとほし其  
甚迷惑仕光秀に乞て兩人をゆきせしめん計りた何なるのみ  
や光秀教て兩人を乞ひけ度合我右禱の混れ後てお申の心一  
致かうしび玉別の志も知ひ申を面目を次守のひとや信  
長とて聞くと其光秀を怒り給ひ光秀の元来は勇士は信  
朋家と茂如とてそのころに我は討て取れ失言を甚悪き奴我  
ら光秀ををりて宣ひる今度汝が軍用とてふす紋あり  
丹波勢も余勢右連人馬のは表来一際奇麗とてせうを忠勤なる  
ゆゑに大和の内丹後其外遠國の害人殺三を引合しよりたわ  
らぬ諸士は抽る糸謂るきゆに水びや又稲系係禱守が身集  
致後内親女名和和泉守兩人を武勇の者たるは計りた

よせを知をを文抱へ並はをた格とて稲系がき山越の者  
稲家系を接持するゆゑに諸士の凡俗を接ひ己が用はゆる  
糸をく不届のあり内親女和泉守兩人は切腹中付じと怒り給ふ  
光秀とてや言ふもく長つて退世する小猪子兵助けりを乳毒  
通ひとて信長とて宣ひまじと名和和泉守を稲系へゆきせ  
り致後内親女も信長稲系をゆきせと勅むれも致後教て是れ  
まじ其信長光秀に仕へる信長も御怒り解給はる光秀とて  
責て宣ふ申は法は消され遠い内親女をえのびく石はの我を  
侮り茂如とて糸奇懐とて進士と命し竹刀を和光秀をうらむ  
とせ給ふ光秀恥辱かきうらむ一向信長とて恨まじとせ給ふ  
光秀は二百貫の石銀より今三十七万石の大名とて是れ

真田記三篇卷七



真蹟記三篇卷七



先帝御食應役  
と命せられ  
後叙と  
造営  
とふ  
園

真蹟記三篇卷七

唯任先秀再恨信長云

天正十年八月の日に、本國より上客の来りしに付て、信長云、安土乃

大寺院を縁結と定めし、惟任日向を乞ふに、先秀曰、命せられ、勿論跡踏のしと、いふと、別は信合らる先秀の室うと、袖て心を解く、け度、食意司、命せらるる、面、目、の、似、り、とて、彼、大、宝、院、の、御、殿、を、補、理、壁、に、画、き、扱、り、彫、彩、奇、樹、怪、石、花、草、を、と、て、樹、籬、の、暉、風、の、色、を、う、と、く、も、山、海、の、魚、を、取、と、て、畫、設、け、式、正、の、筋、振、盪、の、足、令、浪、を、名、樓、は、其、外、に、方、の、番、所、踏、次、の、教、團、固、り、る、人、の、目、取、替、む、信、長、を、人、を、して、け、信、構、を、見、か、せ、り、其、若、兵、法、は、さ、る、を、過、り、先、秀、を、召、て、信、ら、る、は、今、度、の、御、食、應、司、小、心、得、や、と、も、さ、き、を、

兵を召し、世の希方る、恥、を、集、め、七、宝、を、持、り、持、り、樓、は、法、か、の、毒、を、思、慮、る、き、憐、れ、り、と、い、ふ、に、禁、裏、仙、洞、の、勅、使、中、向、中、の、け、し、何、と、以、御、食、應、司、の、体、も、き、や、今、度、の、信、構、我、心、よ、る、に、是、角、又、即、左、邊、門、に、は、女、代、り、て、食、意、司、と、い、ふ、人、間、女、の、坂、本、に、向、り、休、息、と、い、ふ、と、信、長、さ、は、先、秀、を、召、て、取、り、奉、る、と、い、ふ、に、思、ひ、以、日、衆、度、の、罪、を、き、に、和、し、め、と、思、ひ、我、を、惡、く、持、り、何、の、何、の、か、い、は、ぐ、く、甚、き、や、と、云、ふ、怒、恨、を、お、ろ、勝、り、怒、り、顔、色、を、取、り、さ、る、は、元、々、き、大、お、ろ、く、日、衆、ら、の、ひ、己、身、の、汗、を、以、看、見、面、を、と、遠、く、悽、怒、の、色、を、お、ろ、け、い、と、何、も、思、ひ、ぬ、り、以、來、の、お、ろ、彼、が、改、を、お、ろ、す、に、中、知、後、に、近、士、小、姓、の、面、々、顔、を、合、せ、て、三、面、に、於、て、本、林、蘭、丸、は、と、ま、て、先、秀、が、側、に、立、寄、り、上、を、方、る、ぞ、と、憂、を、う、け、後、先、秀、の、扇、を、取、り、お、ろ、す、に、鳥、帽、を、破、り、と、て、髪、孔、を、頂、刺、入、て、血、流、る、



先秀再い  
信長と  
眼の  
國

眞言三々卷七

十一

以勢教度のお擲其眼少るうらむとぞと思て退出と

け蘭丸とくる者先は宇佐山の戦て討死せ森三九清門若殿  
が次男森勝茂が事三九清門の次志賀郡と死せ又我死の後勝  
茂蘭丸切雅ちふより先秀のあひて死せ又蘭丸元来徳の  
英智の勇量えんれ信長とて争く邊の長人が後群の不在  
宛多るべき思ては今年蘭丸二十二歳に成り岩村又万石と  
中場ひ追く大身なえらるべき者として諸人乞うやめり是か  
先信長と蘭丸と寵愛の余り種々の秘器奇宝の救くとえ出あひ  
け中ひは女が事おろくか撰とてはとゆるふ蘭丸若て小居文は事  
はしき物かゞゞと申信長と笑いあひは是等の秘器重宝の外は  
事いあありやくけ蘭丸漢でうらむ事か又三九清門の次志

賀郡を賜り居も被地して出生しては父の門外弟とて侍ふ今  
惟任先秀のけし賜ふ表と名懸を父が外地をお續けはるの外是  
に事とてはと申信長とて國に我もさくよりこそおり今二  
三年お待たぬはが事しはと宣へ蘭丸個所流し恩を謝け  
け河次の間様子のけりては連夜師昭巴は橋系に座懸くと居り  
りうが此情話をばて事の序は先秀の若先秀大に怒りき叔蘭  
丸父の不在ちるは申して河野忠と長我不在を事むりてこそ  
安う孫其上信長とのけり三年と待たぬはが事しはと宣へ蘭丸  
我父の不在ちるはと怒りては我を滅せとてと申りては是れは  
根ざちるりうが事しは信長と蘭丸が事しはと怒りては是れは  
秀に与は外地今又百とらとて急を思惟ましくて先



信長云  
蘭丸よ  
情話の  
圖

真景記三篇卷七

其の蘭丸を舞せしむるに宣ひたる先秀より其地強き母のこころ  
 むるに強く舞てそのはのなるに蘭丸をより先秀と添く悪  
 こ折もゆふ原とこさやと思ひ居るる恨みされば今日先秀  
 が故をおぼと信長との命に終ふは教書の小性よりと蘭丸  
 独り進み出く元来生と得たり別方に任せしむ打擲はるるに  
 不備あるるに叔父蘭丸いふにかくまで信長との露毫はあふ  
 と易方よし生優あふと信長は蘭丸未十三歳の時信長と  
 に幼終ふ蘭丸信長との御指添と執て侍と信長と剛の窓  
 より何の心もなかり蘭丸と刃終ふに蘭丸被御指添の刻とやのさ  
 ごと隙の教を幾度も兼居り信長と其後小性と集  
 めけ指添の鞘の刻つる程終るる露毫の了るる者又賜ふを

きぞと宣ひたる小性も亦二十と云ふ二十と申し蘭丸の  
 よ言と信長と蘭丸いふ小と易終ふは御書の中より小性  
 先より其教を兼て是居り以間露毫のいともなかりは  
 信長と其志なる感と終ひけ是添を蘭丸の賜ひるより  
 露毫並者なり日々に其身にうらむ

惟任先秀三眼信長云

同月十七日羽柴統元が秀吉に北河内を討つて使中する松の城川  
 へ水堰を堰入るるに及ぶに居城既より且夕あり終る毛利右馬  
 照元吉川小又川を大軍を以て後詰のため出張し及びは年計討  
 外に沖出馬ありて中園西園惣務のふと一舉に征伐  
 する者として竹へは信長とては百照元と下の出陣こそは

信長云  
蘭丸を  
試す  
徳小園



真景言三郎卷十



不承の幸とていふに時を失りて出馬して一時は唯雄と極むとて  
乘に出陣の氣をさめど先きの面く其用意を以て尚月中に自  
國をきて使中へ下向せしとの事なりと其人く福休をいひて  
其書三曰

此度使中國為後治道日彼國可為出馬者也依之  
先きの之強く自我干先至彼地羽柴筑前守可征指  
者也為計多熱三郎及日紀保守及日三九清門及垣休  
右郎及惟任日向守及細河刑部左輔及中河勢平及  
山右道及安部仁九清門及垣川伯耆守及

信長判

天正十年八月十九日

とぞ記されたる光秀が臣下明智左馬次は治右清門は日三九清門妻  
本主計院後田代又即仁王天佃馬守並河掃部友村と和泉守身  
田九清門尉三宅及兵清今岸親母溝尾兵清進士他九清門等  
け回状を見んく大と怒りやたる事家今一方の大おろく幕中  
室系極朽本を始に丹及兩國は救あつて尚おの上よ出べき者  
小回の幕下に一面雲のく物るよ女官小身の為計多垣下に出  
のせらるる系女法の依よりとるや割(秀)者が指圖よまうん  
るき(秀)者以女念の決守之其上をかくして御食應司の役目  
とらに森蘭丸をして打擲せし給ふの悉く尚おの恥辱死を  
しも意るはしき後よりひやと後をほめやうふぞ光秀の  
後よ川をたて入実くはるやさうとて信長云の御下知

かつに限らぬ思ひ返けぬのみ多くはまはる先年信長云  
 日本に退補使交らぬ所東海東山の二道に勝川龍道小陸乃  
 ち兼國後理亮南海道依之間右衛門尉山陽道羽柴龍元  
 山陰西海の二道と某々令せしむる丹波平均の後但馬國征伐  
 ののを訴ね及ぶとくども終は許容され却て山陰山陽乃  
 西道にも羽柴龍元を征せしむる先年先年天下の人民は討  
 面目を交ふ義ゆ之其上先月と兼國擲せらるる二度眼を合  
 むる後とてくも古語にも君君とてはくどもは信長とてどんがみ  
 なるはれとてうたふ命とるる丸強て眼むきみはあはれとそ  
 福状と刺をと先くへを送りたる其羽道信長云善山與二  
 上使して中務其報の惟任日向のに出雲石見の兩國を編

るべきとれ御ことたり先年先年と意の報きなる山守て  
 中務の西國御拜然然と日月出なぬ去るる向丹波道にの二國  
 いたるとらるのば其旨は先語ありとてとや捨ててめぬる宮  
 地いと先年先年におく良等と周夜は燈火を交ひらるるはと十方  
 を交ひ周夜は明智左馬右進と出く中務の出雲石見の西國に  
 来平均せむ相向ひ合戦を交結ぶ其中は向丹波道にを右とら  
 とるは妻子眷属とらるるも身と保たべきとてく許すもよらぬ  
 も付た不くはく戸を曝んぬに備き次第のきのの福去今日の後  
 きを先考ふ先之同信長林依後守荒木村重等がむらとく  
 家も滅却せしむべき信長云の御不存の程後と熱てみるがむらと  
 先年の覆るは見て後年の滅つとこそや以彼方より其まの取と

先秀三ハ  
信長云々  
怒る國



真蹟言三外編卷七

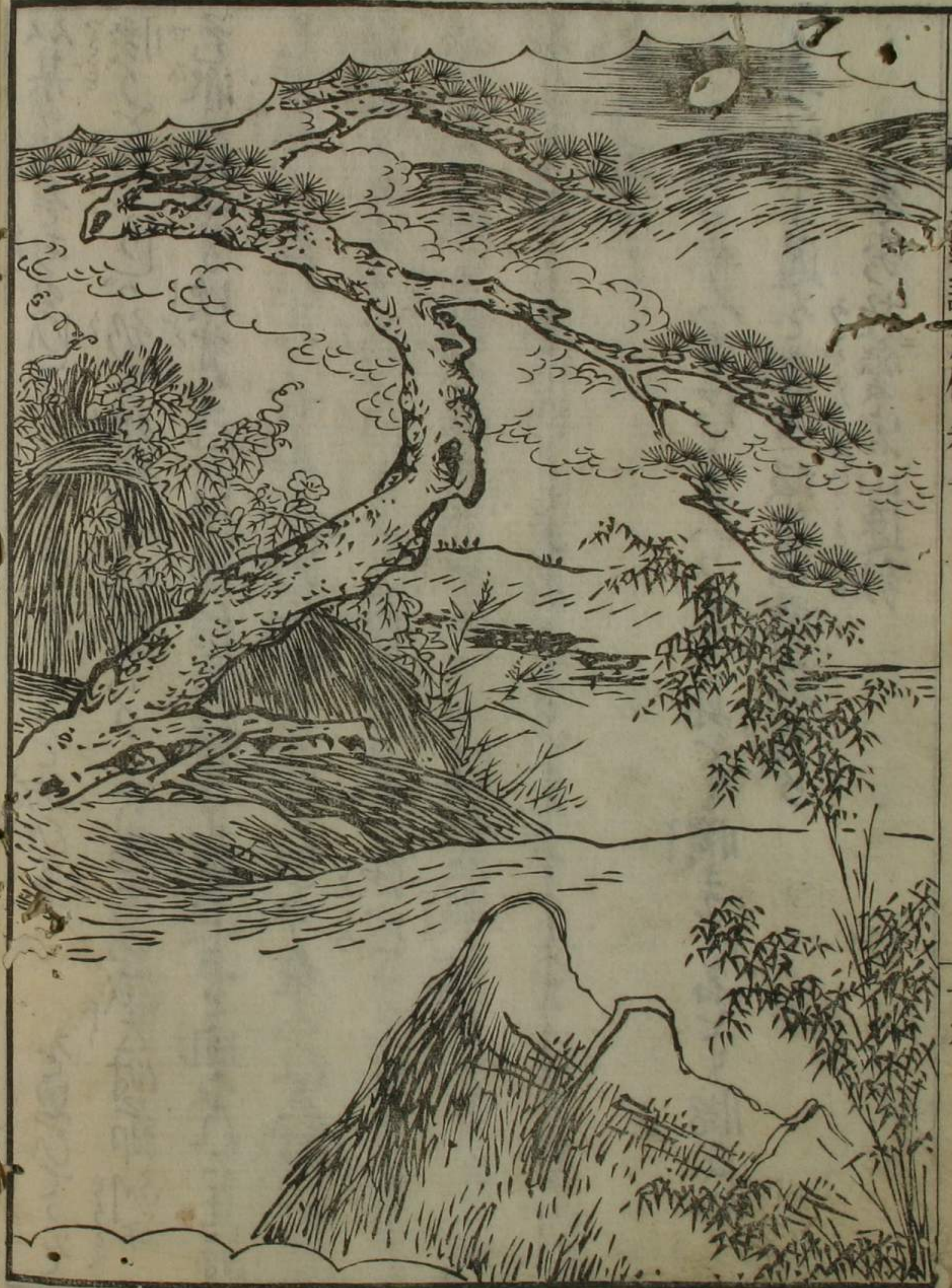
十七

ざり先は津致の候は申し思へば此は怒りたる眼は涙を流さ言を  
(産)ヤクハ妻本居田に天進士備尾の女も皆二日又河原邊此一を  
をぞ進めたる光秀の氣承より悲死して居りしが其時諸臣に白ひ  
中より我身は御き者なりとも源家累代の嫡流士故伯耆守於  
法が後流より叔代徳及明智又住居世よまゑる弘治の比より永禄九  
年迄の事と聞くと御回終は誠意の御倉身身をもせ居り且信  
長のおきいより故阜に來て小回又仕(日)月くよ武功を勵み功を  
立(居)て元龜二年西道に切陸(天)三年丹波と討て救多の同力  
を以て終は丹波を領せりし時汝は遠く忠勇よりなる小回又仕へて十  
七年信長が備代恐顧らむにありは君恩といふも女等と諸  
たは我武勇の侍先と切たるは先月甲辰を以て汝は信長自身奉を

以某が頭を打ちしより幾度か恥辱を忍び居るの事を思ひてこそ  
勝りと發ししが形も難儀を仕無らむといふ尚家の威を耐節刻素  
乞派よ及べざる汝守之由月下旬信長信忠と洛のべきと聞かれ其時  
乞が頼ひを思ひあせ兼(其)後(汝)急ぎ坂本龜とて立誠相結る  
腹脹の事(中)津(計)を由(汝)計(し)りまゝく隠密なるべしとて密中  
合せ玉西國出陣の用意(汝)信(長)服(を)乞(安)とて坂  
本にてゆりたる心の内こそ思ひ申して見え方こそなりたる日來教  
寄の道々々

心ちぬ人も何ともいへば身とも惜まど名とも惜まじ  
と祈詠し道を急ぎ坂本の城よへむらり

光秀が愛宕山陣歌



真言宗卷七

十六

此時在森蘭丸信長之御者(出密)に言じけるに惟任光秀の天つ工  
 を仕る侍(てい)のいほに信長はまじし斬て捨ひん(と)中(に)信長(は)何(の)成(を)  
 尋ね(て)蘭丸(は)今(も)光秀(を)飯(を)喫(ま)ひ(に)入(り)る(に)飯(と)嚙(む)ど  
 何(の)中(に)入(り)て(は)い(ひ)が(ま)に(持)ち(て)著(し)と(は)言(は)れ(り)も(と)是(れ)  
 此(の)信(長)と(は)頃(頃)ありて(は)尋(尋)ひ(て)何(の)を(を)按(あ)入(り)て(は)天下(の)  
 一(一)大(大)の(の)思(思)ひ(は)の(の)なる(に)其(其)思(思)ひ(は)ま(ま)の(の)を(を)察(さ)する(に)必(必)ず(と)謀(ま)心(心)を(を)企(企)る  
 者(者)ならん(に)以(以)て(は)光秀(が)君(と)恨(を)する(に)條(は)教(を)多(く)申(し)ま(し)り(て)復(は)御(中)  
 敵(み)あ(ら)じ(に)い(と)申(す)蘭丸(は)眼(眼)力(を)誇(う)り(て)い(ふ)も(と)其(其)中(に)上(上)る(に)も  
 信長(は)心(も)は(は)強(つ)り(に)復(は)令(を)光秀(を)叛(を)心(を)企(企)る(に)何(何)程(の)ゆ(ゆ)め(に)光秀  
 が(は)身(身)皆(皆)我(我)忍(忍)ぶ(る)事(は)な(ら)ば(は)九(九)横(の)ゆ(ゆ)め(に)三(三)横(も)は(は)し(と)て(は)心(心)寛(か)て  
 御(中)に(は)御(中)の(の)末(末)を(を)と(と)是(是)ら(ら)る(る)去(去)り(て)は(は)惟(惟)任(任)目(目)の(の)事(事)光秀(を)叛(を)中(の)城(を)

又(は)海(海)邊(邊)城(城)代(代)光秀(の)が(は)叙(叙)又(は)明(明)智(智)十(十)平(平)次(次)光(光)彦(彦)入(入)り(て)長(長)岡(岡)毎(毎)希(希)二(二)宅(宅)衣(衣)  
 那(那)秀(秀)初(初)奥(奥)田(田)宮(宮)内(内)一(一)武(武)山(山)本(本)對(對)馬(馬)守(守)和(和)之(之)入(入)り(て)山(山)谷(谷)防(防)飛(飛)彈(彈)守(守)登(登)車(車)  
 敵(敵)後(後)内(内)苑(苑)友(友)利(利)三(三)伴(伴)勢(勢)与(与)三(三)郎(郎)貞(貞)仲(仲)村(村)誠(誠)三(三)郎(郎)系(系)則(則)等(等)を(を)集(集)め(め)密(密)  
 又(は)其(其)去(去)り(て)の(の)次(次)身(身)と(と)抽(抽)活(活)り(て)尚(尚)家(家)ね(を)の(の)時(時)及(及)ひ(ひ)ぬ(ぬ)ま(ま)居(居)る(る)自(自)滅(滅)せ  
 ん(ら)う(ら)の(の)洗(洗)て(て)人(人)を(を)制(制)せん(ら)い(は)ま(ま)じ(と)既(既)叛(叛)逆(逆)の(の)計(計)略(略)及(及)べ(べ)り(と)身(身)の(の)心(心)俸(俸)何  
 ん(ら)や(と)云(云)此(此)時(時)皆(皆)一(一)日(日)は(は)信(信)長(長)と(と)怒(怒)り(て)悖(悖)り(て)弥(弥)逆(逆)心(心)を(を)進(進)め(め)ら(は)光(光)秀(秀)雪  
 上(上)に(に)霜(霜)を(を)積(積)が(が)ら(は)く(と)益(益)叛(叛)心(心)を(を)強(強)め(め)ら(は)る(る)懸(懸)う(ら)る(る)次(次)身(身)之(之)光(光)秀(秀)が  
 臣(臣)下(下)悉(悉)一(一)人(人)あ(あ)る(る)の(の)勇(勇)ま(ま)り(て)我(我)場(場)出(出)て(は)武(武)功(功)を(を)な(な)し(と)て(は)天(天)下(下)の(の)人(人)目(目)を  
 驚(驚)か(か)す(と)も(と)仁(仁)義(義)を(を)希(希)る(る)者(者)一(一)人(人)も(も)あ(あ)ら(は)ず(と)一(一)言(言)も(も)諫(諫)言(言)を(を)希(希)る(る)者  
 なく(と)先(先)に(に)進(進)ん(て)我(我)逆(逆)の(の)罪(罪)を(を)論(論)ず(ら)る(る)每(毎)斬(斬)如(如)く(と)次(次)身(身)之(之)時(時)は(は)光(光)秀(秀)中(中)途(途)  
 け(り)明(明)智(智)在(在)馬(馬)谷(谷)右(右)邊(邊)門(門)に(に)且(且)天(天)領(領)馬(馬)守(守)並(並)河(河)掃(掃)部(部)と(と)丹(丹)波(波)の(の)山(山)



山崎の山

山崎



山崎の山  
秀  
愛  
右

山崎の山

山崎

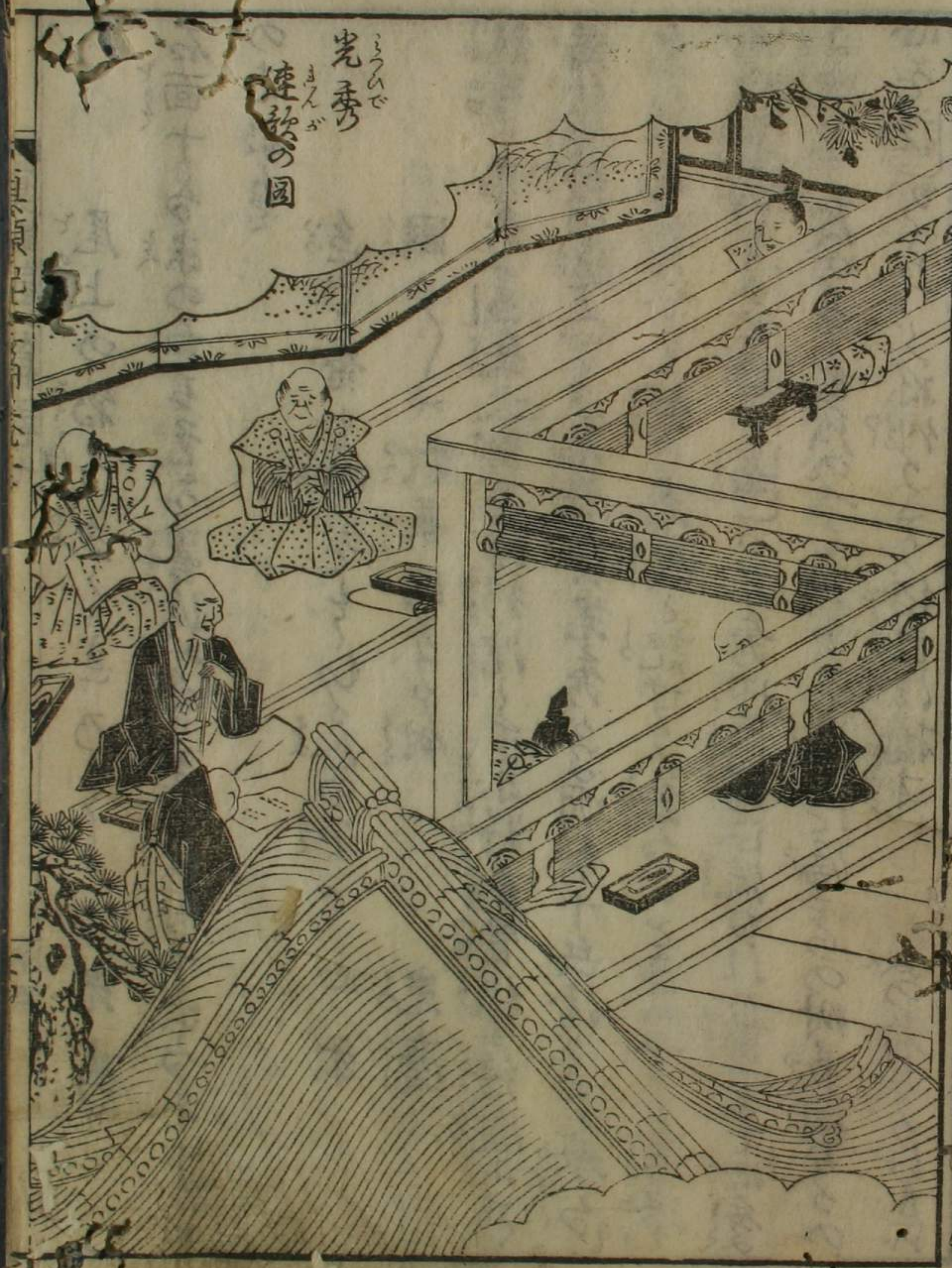
ともし急ぎ海國龜山の懸より荒木山懸守忍波又即兵衛等  
若階又云國々外換の者より出雲石人の群於地へ向ひてきて度の中板  
橋素る晦日垂く龜山(集は)とて其面く又月廿四夜を  
て丹波國ぞゆりる月廿七日先秀三子余誘を引率坂を立  
て白河紙又舞り却へ入して西系をこく嵯峨の釈迦寺の末に  
客を兵士に白ひやる我御祈禱のゆゑて愛宕山は清通夜せ  
と雖も明日丹波(懸)向ひて同使等のそより唐櫃城又入山を經く龜  
山は糸巻とてと奥田宮内村上和泉守等妻細取り士率と引率西  
より龜山に引連りたるまより先秀の坐岩山に登り大権現と詣り  
心教を凝し三度園を中園出勢祈のおとて西之坊威徳院妙祐  
房より其夜宿日以替りる道より百顔の草敷を真妙を行

祐房元來連秀の連人ふれいけ道の堪能なる紹巴橋昌叱法橋心  
兼法師兼如法師止之坊大岩院宿原等妙に候と教るい

時をいまわめがーたをれ又月哉  
あ上まゝ心屋乃復山  
花露るいけのなぐれと堰ぬて  
風の霞をふれ送れ書  
妻も稚種のいさや冷ぬらん  
行安神もありけのすね  
うのまゝありぬる草の枕  
園をれりいける神人のねむ  
秋もたてとてき方よゆと返り

先秀  
妙祐  
紹巴  
宿原  
昌叱  
心兼  
兼如  
妙法  
妙祐





光秀  
連歌の園



真蹟言三々編卷七

十三

尾上の初はつ之はつとくまのそと

石面いし十じゅう末まへのはつ末まへのはつ末まへのはつ末まへをあ畧りやく以も此こゝ會くわい光くわん秀しゆのはつ十じゅう六りくあり名な跡あとのはつ末まへ也

色いろも香かも碎くずをととらむまのし心こゝろ初はつ  
國くにくはつ長ちやう用ようちやう附つ 心こゝろ初はつ  
光くわん慶ぎやう

執しやく事じのはつ光くわん秀しゆがはつ居い來き六りく郎らう兵へい侍しやう初はつ流りゅうとて東とう野や加か常じやう縁えんがはつ後こう流りゅうにて倭わ越えつ連れん款くわんのはつ道だう人にんちやう光くわん慶ぎやうとい光くわん秀しゆがはつ子し明めい智ち十じゅう兵へい侍しやうのはつ之し奉ほう也  
光くわん秀しゆがはつちやうはつもも怨おんとい光くわん慶ぎやうとい記きせらるまときいん今いまとい西せい奉ほうにて長ちやう用ようちやうときとい後こうのはつ光くわん秀しゆ而に去き波はのはつ正せい流りゅうにて苗めう字じとい附つ也  
又また准じゆん今いま度たのはつ奉ほう也はつ瓜くわのはつくわん天てん下げをはつ治ちりに海かいにちのはつ附つ長ちやう用ようちやうのはつ心こゝろをはつ祝いかくいつつつ祝い也はつ紹せう巳し法はふ橋きやう才さい智ち明めい敏みんのはつ者しやちやうけい也

光くわん秀しゆのはつ侍しやう也はつ光くわん秀しゆがはつ叛はん心しんをはつとらむま天下てんかのはつ大だい壽じゆ也はつ出で來きぬらんはつ獨どく心しん又また思おもひはつ居いりはつ其その夜や連れん奇き終しゆうりて後こう紹せう巳し也はつ皆みな光くわん秀しゆがはつ次つぎのはつ間まにて席せきをはつ設しやうけはつ希きひはつ也はつ又また光くわん秀しゆがはつ眠ねもなくはつ後こう夜や思おも惟た余あま也はつ又また嗟さ歎たんとらむま三さん又また孝かう子しのはつ次つぎ也はつ紹せう巳し法はふ橋きやう甚じ牙が何なに也はつ又また同どうくはつ光くわん秀しゆがはつ終しゆうるまとい也はつ又また比ひてはつ也はつ小せう室しつ多た也はつ人にんのはつ心しんとい知ちらず也はつ也はつ紹せう巳し再さい言げん語ごにて復またちやう東とうのはつ愛あいもなくはつ也はつ又また自みづからはつてはつ夜やかのつはつとい明あらはむま廿に八はち日にちのはつ曉あけ也はつ光くわん秀しゆがはつ再さいびはつ大だい授じゆ理り也はつ又また良よくはつ礼らい拜はい也はつ又また若も令れい也はつ十じゅう投たう也はつ又また百ひやく貫くわんをはつ奉ほう獻けん也はつ又また西せい之し也はつ令れい也はつ十じゅう兩りやう亭てい坊ぼう也はつ日にち拾しやく兩りやう其その外がひ連れん款くわん司し紹せう巳し也はつ心しん希き也はつ又また如ごと大だい若も院いん也はつ又また令れい也はつ拾しやく兩りやう定てい也はつ又また愛あい宕たう山さん中ちゆう也はつ又また二に百ひやく貫くわん也はつ又また附つ也はつ又また眼まなこをはつ告つげはつ丹に也はつ

山へそねきりる

繪本古図記三篇卷之七終

